

吉富町外1町環境衛生事務組合 視察研修 朝倉市環境センター

平成24年10月16日(火)

三田 敏和

10月16日、吉富町外1町環境衛生事務組合の議員で、朝倉市環境センターにお邪魔しました。目的は当組合で管理する「周防苑」し尿・浄化槽汚泥処理施設(40年経過)の老朽化による建設のためです。いずれにせよ迷惑施設という見方はどの施設でも課せられた課題で朝倉市も建設ぎりぎりまで説明に明け暮れ、条件整備を余儀なくされたようです。現在6年目徐々に住民に理解されているとのこと。副産物としてできる脱水汚泥を堆肥にリサイクルしています。当初は無料の汚泥肥料はとても人気で今は50円/袋でも飛ぶように売れ、販売量を調整しなければならない状況と聞きます。施設等は新しくなっても適切な運轉管理と放流水の適切な水質管理を図り、ホームページなどで水質データの公開が求められています。

常任・議運正副委員長研修 「委員会の運営」について

平成24年10月25日(木)

峯 新一

10月25日、福岡県自治会館において、福岡県町村議会議長会主催で、講師、広瀬和彦氏による「委員会の運営」を題目とした研修を受けました。議会の重要性を実感するとともに、視野が一段と広がったような気がします。これからの議会運営に応用していきたいと思ひますし、上毛町の発展のためにも更なる努力をしていかねばと考えています。

上毛町議会勉強会 九州圏域で考える道州制と基礎自治体のあり方

平成24年10月26日(金)

宮崎 昌宗

げんきの杜において、九州大学産学連携センターの谷口博文教授を招き、「九州圏域で考える道州制と基礎自治体のあり方」をテーマに勉強会を行いました。

講演では、九州ぐらゐの規模で自立した広域経済圏を形成し、地域が自立して世界とつながっていく成長戦略の選択肢の提案や、地域経済力の回復のため、現場に近いところで自らルールを決定する権限と責任と能力をもつ必要性を説いていました。

そして、どんな「地域」を作るかは、「目的(設計思想)」が大事であり、目的を達成するための戦略的な「政策」が必要で、政策を遂行するための「手段(組織論)」としての統治機構を作ること、統治機構が十分な能力を持つには、客観・公正・中立で透明で信頼性の高い組織でなくてはならないということ学びました。



豊前市外二町清掃施設組合 視察研修

平成24年11月7日(水)

株式会社エフピコ 九州選別センター 佐賀県神埼市
日本耐酸壘工業株式会社 福岡工場 福岡県田川市

宮崎 昌宗

(株)エフピコは食品などで使われる「簡易食品容器」の国内トップメーカーです。1980年代、アメリカで起きた使い捨て容器を使った商品の不買運動をきっかけに「エフピコ方式」※と呼ばれる食品トレー等のリサイクルを1990年から始めています。

このエフピコ方式により、石油から新たに作るトレーと比べ、35%のCO2排出量を削減できます。当然、リサイクルには様々なコストがかかるため、商品単価は高くなりますが、スーパーなどの小売業の環境意識も高まり、年々リサイクルトレーの需要は増えているそうです。

また、視察した九州選別センターでは、障がい者を多数雇用し、2012年には厚生労働省から表彰を受けています。民間独自で国に先立ち、環境への配慮からリサイクルを始めた先見性や福祉の向上にも努める企業風土に感銘を受けました。

日本耐酸壘(株)は九州で唯一の製壘(びん)会社で、各種ドリンクびん、調味料びん、などを生産しています。工場では、リポビタンDのびんを主力製品として1日あたり80万本を製造し、これに加えその他のビンも製造しているとのことでした。びんの原料は80%がリサイクルされたガラスびんであるカレットと、けい砂・石灰石・ソーダ灰といった天然素材で作られているため自然に優しい商品です。近年、ドリンクなどのびん容器が少なくなった気がしますが、リサイクル率の高さを考えれば、びん容器が見直されても良いのではないのでしょうか。

※エフピコ方式

消費者・小売店・包材問屋・エフピコの4者が一体となってリサイクルするシステムで、スーパーなど自治体に設置した回収ボックスに、消費者の方々がご家庭で洗浄したトレーを運んでいただいたものを包材問屋が保管し、エフピコが引取再生します。

議員研修 東日本震災地を視察して

平成24年10月3日(水)・4日(木)・5日(金)

1日目 宮城県石巻市

高畑 広視

石巻市は人口約15万人の都市で東北地方太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波、及びその後の大きな余震により発生した人的被害のうち、死者と行方不明者は約4千人。5mを越す津波が次々と押し寄せ、数千人いた6~7つの街が一瞬にして無くなったと言う。津波は北上川を49km上ったとの話である。現地を視察して津波の大きさ怖さに言葉も出ない。ただただ石巻観光協会ガイドの話の聞いていただけであった。地盤は70cm沈下し、海岸のコンクリートの護岸の沈下、建っている鉄筋の建屋も歪んだり、壊れかけたりで震災当時のままであるものが目立つ。震災から1年半が過ぎて前の姿に戻ったと言う。しかし、家々は消え、人々の姿はなく、瓦礫やつぶれた車が何か所にもうずたかく集められている。処理するだけで50年はかかると言う。何が震災前の姿に戻ったのだろう...

海に面した人々の住んでいた街は、壊され、流され、今はコンクリートの土台のみ残り、広い野原が出現して草が生えている。我々が訪れた海辺の街は一部ではあるが、200の企業があり5千人の漁業関係者が働いていて、年間売り上げが200億円あったという。しかし、現在ではその売り上げはなく、こういう状況の地域があちらこちらにあると言う。言葉も出ない。悲しい現実である。

家を無くした人々は散り散りとなり今でも避難生活を続けている。仕事もなく、仮設住宅に入った人は、日が経つにつれ病気になったり、自殺者も多いと聞く。胸が痛む話である。さらには、生きている人は「こんなことなら波に飲み込まれた方がよかった」との会話もあるという。現実の話に何も答えられない。震災後、挨拶が変わったと言う。「生きていましたね」と。被災者でもあるガイドの話は涙なしには聞けない話である。我々の議員研修が東北復興の一助になれば幸いである。



2日目 宮城県美里町議会

大山 晃

美里町は、平成18年1月に小牛田町と南郷町が合併し、誕生した人口25,190人の町です。議員数は15名。視察の目的は全国議会広報コンクールにおいて「議会だより」が平成20年~24年にかけていろいろな賞を受賞している議会です。

議会だより発行にあたり

- 小学校5年生が読める記事にする。
- 紙面の構成と記事の分担→原稿確認→レイアウト→校正
- 一般質問について2問2写、3問2写などの様式のパターンを作っていること。先ず町民が読みやすいようにすることなどを学び、上毛町議会も美里町に見習い努力していきます。



3日目 宮城県川崎町議会

三田 敏和

川崎町は、宮城県の南西部に位置する人口約9800名の町で平成の合併はない。面積は上毛町の1/2以下で山林・原野の占める割合は約30%(上毛町63%)で産業別人口比、予算規模は同程度です。平成21年より議会の活性化について取り組んでいるので報告する。議員数は14名(公明1、自民1、無所属12)で2常任委員会、他に議会運営委員会、公報特別委員会がある。議会の活性化については、一部運用規則で通年議会等取り入れた議会は他に例がある。「議会基本条例の制定」「新聞折り込みによる一般質問等の周知」「議会報告会の開催」「自由討議(議場内での議員同士の自由討議)の導入」「反問権(対等な質問への踏込)の拡大」「通年議会の導入」法律改正前に運用規則として、工夫を凝らすことは開かれた議会運営を前提に取り組んだことは評価できる。昨年、地方自治法の一部を改正する法律が可決され、議会制度については、「地方公共団体の議会について条例に定めることができる」として、「議会の会期」「臨時議会の招集権」「議会運営」「議会の調査権」「政務活動費」等々が対象だが、行政の生い立ち、議会の生い立ちの違いによる価値観も変わる。我々議会も先進事例を学び時間をかけ、慎重に検討すべきと感じた。



議場に傍聴者用のモニターを設置